

令和4年1月5日発行(毎月5日1部発行)
第62巻1月号(通巻750号)

風土



1

石川桂郎俳句鑑賞

南 うみを

冬 日 に 見 る 円 く 小 さ く 白 き 母 を

(句集『竹取』より昭和三十一年作)
桂郎師の母親は、昭和三十一年の十月に肺結核で、病院に入院しています。ところがこの時、桂郎師も入院中で、手術を受け、退院できたのは翌年の二月でした。取るものも取り敢えず病院に駆け付けたのです。ほぼ一年ぶりの再会です。その母の様子「円く小さく白き」なのです。年を取り、また結核のために小さく白くなった母への想いはいかばかりだったでしょう。

青 深 め て は 太 宰 忌 の 雨 降 り 田

(句集『竹取』より昭和三十一年作)
桂郎師はこれまで、幾度となく太宰治の忌日を詠んでいます。それぞれに味わいがあります。作家仲川川であり、無頼的性格が似ており、何よりも二人とも明治四十二年生まれであることが太宰治への想いを深くしているのだと思います。太宰治の忌日は六月十三日です。桂郎師は七畳小屋の近くの畦に立ち、田の稲が育々と広がっているのを眺めています。梅雨の雨が容赦なく青田を濡らしています。太宰治の死から十年近くになろうとしています。

神蔵器俳句鑑賞

南 うみを

一 つ 咲 く 白 佗 助 は 月 の 使 者

(句集『氷輪』より平成二十年作)
脳梗塞で倒れて以来、遠出はできるだけ控えていたのですが、出版社からの群作の依頼もあり、伊豆大島の椿祭に出かけた時の作品です。「椿祭はじまる島の怒濤かな」の句もそのうちの一つで、器師の胸の高鳴りが伝わります。器師は華やかな椿よりも、「白佗助」の清楚さに惹かれ、「月の使者」と詠んでいます。器師にとって月は死者の魂の棲む星で、白は魂の色です。亡くなられた奥さんと対話しているのかもしれない。

西 行 の さ く ら み に ゆ き た ま へ る か

(句集『氷輪』より平成二十年作)
この句には「悼 浜明史」の前書があります。器師にとって前年の丹波日ノ谷山成就院での句碑建立で、再会したのが、最後になってしまいました。明史氏は病気を押しての参加でした。器師と明史氏が、時間を惜しむように寄り添っていたのを、筆者も憶えています。その一年後の桜のころ、平成二十年四月四日に、明史氏はこの世を去りました。「明史さん、西行の桜を見に旅立ったのですね」と呼びかけています。

牛蒡掘

南うみを

出雲三句

八雲立つ空に湧きたる秋津かな
玉砂利を踏む音千木へ新松子
国引きの稻佐の浜の秋の作
四阿の高く浮きたる水の秋
まつすぐに朝の来てをり貴船菊
秋手入れまたも隣へ小枝飛び
溝蕎麦を押し分け鍬を浸しけり
馬糞紙の素十の句集身に入みて
洗ひたる鍬に名残の月あかり
縁側のつくづく欲しき衣かつぎ
穴すでに腰を呑み込み牛蒡掘
逆立ちのおぼつかなくて初鴨よ



竹間集

同人作品



円位堂

落合 絹代

虚子旧居吊りて問なしの柿二連
澄む水の沢音ひびく円位堂
鴨立沢の夕暮を待ち秋惜しむ
秋声鎌和田柚子逝きや庵主柚子の句碑あらた
身に入むや人に会話てふ葉
帰還せし兄へ新米こそ馳走
水落ちて早池峰すでになき田の面

藍の花

門伝 史会

隣り合ふ一社と一寺木の実落つ
腰下ろす石の温みや菊日和
木の実降る音に真昼の深さかな
ここよりは鳥獣保護区秋の声
神木に猿の腰掛源義忌
ひかりつつ水の急げり蘆の花
秋水を覗きて心覗かるる

鱒雲

鈴木 石花

食ほそく身細ふなりし鱒雲
玻璃越しの音して木の実つぎつぎに
治療室九階に「枯葉」口ずさむ
逝くときは聖路加と決め秋の暮
秋深し縁の聖路加申し込む
秋逝くや夫のすべてを子に託し
つるべ落し返信つねに「ありがたう」

鱒雲

豎山 道助

ケインズの捨てられてゐる落葉籠
父もまた薩摩の生れ南州忌
鬼城忌の上毛三山秋の声
生誕もまた菊の月源義忌
鱒雲白墨で描く不等号
黄泉へ行く参道はなし萩の声
渋柿や整数論に疑似素数

疫病討つえやみ

浜 福恵

疫病討つ田仕舞の煙野に立ちて
蛇笏忌のかくまで深さ海の藍
七常伽藍のむかしや冬のはなわらび
十月の海に掠れて鳶の笛
弟へ綴るたよりや十三夜
平和な国の灯点し頃や大根炊く
由良川に鮭還り来や柿簾

枯葉

山田 暢子

枯葉踏む昔の音を響かせて
晩年は駆け足で来し野分雲
つるべ落とし娘が片付けて母の家
コスモスに花盗人となりにけり
終着駅見えず見えさう雁わたる
負ふものはいつも重たし秋深む
遺句集に紅葉一枚葉とす

曼珠沙華

岩木 茂

天上へ山門ひとつ曼珠沙華
膳の臣の墳とや蕎麦は実に
落鮎や投網は川をひと掴み
旅宿に白眉の翁神無月
すだ椎の百の走り根木の実降る
引揚の丘より落葉掃きの音
川霧に影うつすらと明智躰

初しぐれ

小林輝子

雲抜ける度締めゆく後の月
夫植糸し椿に懸かる雪迎へ
夕さりに帰る輩桂郎忌
落雁のほどよき甘味初しぐれ
薪割りの音のひねもす村小春
火の見えぬ暖房器具の空々し
杉山の影伸び来たるまたぎ村

雁の声

田中佐知子

師の声を聴かん鵜の瀬や雁渡る
かりがねや寄進瓦に書く願ひ
注連張つて神となる石天高し
若狭井の香水となる秋の水
一投の投網捕ふる下り鮎
落鮎の網外されしとき撓ふ
草の絮前方へはた後円へ

秋の声

中村 洋子

馬肥ゆる点となりたる草千里
読むうちに正坐となりぬ秋灯下
種採りて薬のやうに包みけり
指先の力に応ふ木の実独楽
最後には捨つる木の実を拾ひけり
良弁の杉より発す秋の声
行く秋の「やるまいぞ」てふ太郎冠者

小春日和

橋添やよひ

月の人も座敷に招き十三夜
剥落の弥陀に秋色濃かりけり
勝ち独楽となりし団栗ポケットに
杣人の講 釈ながし猿酒
波頭立つ銀沙灘冬に入る
一人旅のひとと小春の立ち話
月冴ゆる向月台を後にせり

山河集

同人作品



南うみを選

新米や一斗釜ある相撲部屋 岡本 尚子

その中に天邪鬼ある柘榴かな
木の実降る信玄道の血洗ひ池
新走木箱より出す江戸切子
焼芋も売られ小江戸の菓子横丁

山田 健太

リモートの妻の顔より秋の風
煙突三本粉殻を焼き尽くす
黙食の続く給食秋の山
運動会ぐるりとマスク囲みたる
満月やいつもの席に考がをり

中嶋 陽子

月明や蛹の腹に白き糸
ぐいと脚広げ飛蝗のよじ登る
月明のジャズピアノニスト浮き腰に

ゆく秋の本屋に童話原画展
林檎煮るそろそろ母に会ひたくて

石井美智子

なまはげの面彫る音や神無月
蛇笏忌や日陰の早き短畝
干柿を噛めば山盧の軒の風
発掘の太き巻尺 鴟 日和
白神の水引く工場新豆腐

渡辺 やや

千年を湧き継ぐ神の水澄めり
路線バス芒擦りつつ峠道
伝言の無き留守電や蚯蚓鳴く
露草の地を這ふ茎の猛々し
一人来てまた一人来て日向ぼこ

葱坊主

奥田 茶々

新牛蒡の笹がき水に反り返る
戦ひ待つ竹籠の軍鶏カンナ燃ゆ
少年の匂ひの変はる夏の果
残り蚊の人の恋しき子規忌かな
尖つておんぶばつたは草の色
網代笠かけて露けき一草庵
カタカナの縦書きオラシヨ椿の実
舟で着くルルドの島の石路の花



鳩餅のにつき売り切れ神の留守
嵩をなす骨の白さの朴落葉
ぶつ掛けの深川飯や翁の忌
花柄のマスク浮き立つ八十路かな
風花の激しくなりぬ久女の忌
寒声をあげて持ち上ぐ力石
山火いまカルスト台地駆け上がる
お謡ひを聞いて恋猫うなりだす
畑ぬけて龍太の墓や葱坊主
大櫂天を揺さぶり走り梅雨
六月の墓に何度も擦るマツチ
ぐるぐるとヒッチコックめく梅雨の棕

緑さす

塚原紀代子

クラクション小さく交はず御慶かな
梅の香の微かや湯島切通し
五百里の旅路の果ての黄砂拭く
目借時うつらうつらと乗り過ごし
マスクして付添ひの無き入学式
緑さす実験室に白衣の子
はつ夏のレンズに探す月の谷
かるの子の光まみれの泳ぎぶり



ハンカチのかくあるべしと真四角に
花梯梧わだつみの声聞かまほし
国境なき医師団の上鳥渡る
通りやんせ幼なの丈に彼岸花
蟻の巣に動かぬ蟻を引いて入る
新聞に焼栗包むパリジエンヌ
ホットワイン両手に包む夫在りし
木枯一号東京湾を吹き抜けり
幕間のやうなさざめき冬紅葉
動きさうな牡蠣にライムを絞りきる
一部屋はユートピアなり冬籠る
除夜の海汽笛こもごも鳴り交はし

風の匂ひ

三好 康子

野焼きして昨日と違ふ風の音
雀どち春日散らして飛び立ちぬ
瀬戸架橋沈めて深き夕がすみ
鶉色に芽吹きそめたる大櫂
清明の風の匂ひの書信かな
樗咲く散歩が好きで空が好き
葉桜や蔵店多き運河沿ひ
六月や風にふくらむシャツを着て



さらさらと茶筒を満たす芒種かな
落柿舎に円座が二枚冷奴
湖国暮れ瀬越の鮎に酌み交はす
新涼や枳目を削る匏脣
灯を消してちろろに闇を返しけり
師の句集かたはらに措き新酒酌む
山の辺の馬頭観音虚栗
綿虫を飛蚊症かといぶかしむ
酢牡蠣吸ふしばし頭のからつぽに
冬ごもり照る日曇る日欠伸して
かるやかな破魔矢の小鈴女坂
手囲ひの雪虫の胴ひすい色

風土独語／南 うみを



新米や一斗釜ある相撲部屋 岡本 尚子

「新米」と「相撲部屋」の取り合わせである。素材が近すぎるかもしれないが、とにかく力士は稽古しては食べ、食べては稽古して太り、強くならなければならない。その象徴としての「一斗釜」である。「一斗釜」から、井に新米を大盛りにして頬張る力士たちが見える。

太陽系第三惑星 稲の花 六車 佳奈

まず「太陽系」と置き、大宇宙をイメージさせ、次に「第三惑星」と置き、太陽を回る地球を想像させる。最後に「稲の花」の季語を置き、地球の中の日本の秋にズームアップさせる。私たちがこのようなイメージを駆使できるのは、人工衛星による宇宙や月、地球の映像化が当たり前になったからである。科学の発達が想像力を高めるよい例である。「稲の花」、すなわち米は日本の文化の要であることを知らせてくれるスケールの大きな句である。

運動会ぐるりとマスク囲みたる 山田 健太

本来、「マスク」は寒気を防いだり、感冒等の病原体の侵入をくい止めるためのもので、冬の季語である。しかし新型コロナウイルス禍の現在、一年中誰もがマスクをしている。運動会である

うと然り、「ぐるりとマスク囲み」が、平常でない運動会の現実を、まさまさと私たちに突き付ける。

白鳥の日の道過るとき影に 谷田明日香

「日の道」は、湖や海に太陽の光が一本道のように映る現象を言う。これは、その道を白鳥が横切る時を捉えた句である。真っ白な白鳥が「日の道」に入った途端、逆光に入り影となったのである。白から黒への瞬間の驚きが伝わる句だ。

月明のジャズピアノニスト浮き腰に 中嶋 陽子

「月光コンサート」とでも言おうか。月明の中のジャズライブを描いた句である。この句の世界のポイントは「浮き腰に」で、佳境に入ったピアノニストが中腰になり、ピアノのキーを叩くのだ。その躍動感が伝わり、臨場感のある句となった。

かさりと葉こそりと蛇の穴に入る 根岸 善行

この句は「かさり」「こそり」と擬音語(オノマトペ)を使って、蛇が穴に入る様子と、穴の周りの枯れの進む様子を伝えて面白い世界を見せている。また「こそり」は「こっそり」に通じ、ひっそりと冬眠に入る蛇を描いている。

風土集



南うみを選

太陽系第三惑星 稲の花 高槻 六車 佳奈

秋晴や力みなぎるひらめ筋

小鳥来る地層めきたるミルフィーユ

杖の音に遅れ鈴の音萩の花

築山にさざなみ寄せて花芒

一頭は山の高みへ秋の蝶 舞鶴 谷田明日香

冬初め味噌の香りの寝床まで

雲影を真鯉切り裂き冬に入る

白髪のライダー憩ふ小六月

白鳥の日の道過るとき影に

一つ消し一つ灯しぬ秋の家 上尾 根岸 善行

かさりと葉こそりと蛇の穴に入る

不満足を誉められてゐる松手入

足音で診る整形 医 秋 深し

十三夜蛇の罫置く飾り窓

校庭の掃除当番 金木 犀 逗子 高橋まき子

未だ何か出来さう林檎丸かじり

境内にハイカー集合 初紅葉

真っ白に駅ビル晴れて冬近し

手を放すやうに落葉となりにつけり

秋澄むやたてよこに掃く石だたみ 町田 松本 胡桃

下町の本屋また消ゆ秋桜

雨となる奥湯河原の薄紅葉

海苔巻の端っこ好きや秋うらら

江戸菊や寿司屋の白木磨かれて 相模原 岡本 尚子

むかご飯山の隅借りわが家かな

城攻めの縄梯子なり葛の花

菊の日や鳥居に神楽時刻表

愛嬌を持たぬ木賊や禅の庭

ラスト一秒シュートは逸れて秋夕焼